

## 「東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学文学研究科博士後期課程2年 JI CHENJIA

## ① 学習成果

今回のプログラムでは、京都大学の学生たちと一緒に台北市へ渡り、ソウル大学と台湾大学の学生たちと一緒に、今日の東アジア諸社会に関する（特に移民・労働関係の）諸課題に関する検討を行いました。参加者は今回のプログラムで、最近で関心を持つようになる東アジア諸都市でのジェントリフィケーションの現状に関する発表を行った。この課題は私の出身地の上海だけではなく、東京、ソウルまたは台北、どこでも直面している現状とかがわっている。それゆえかもしれないが、参加者たちは質疑時間でいろんな貴重なコメント・疑問をくれただけではなく、発表後も関連の話題についていろんな討議を続けて、申請者にとって、たくさんの視点からこの課題に対する認識を獲得する貴重な経験になった。

## ② 海外での経験

台北へ行くのは二回目であるが、前回の観光客気分の経験とは違い、今度のプログラムでは、台北という都市、特にその日常生活についての認識を深めた。台北の友達につれられていろんな地域で回って、その大都市でありながら庶民でも気楽に過ごせる雰囲気魅了された。行政に支持された資本投機が激しく進んでいるアジアの他の大都市と比べれば、台北の町はいまでも一般の住民にとってとても住みやすい街だと実感した。

## ③ プログラム内容

台湾大の学生たちはワークショップのため、二日間の素晴らしいフィールドツアーを設計していただいた。そのおかげで、私たちは台北の歴史や今日の諸社会問題に対する認識を獲得した。特に台北における多数のエスニック・グループ（インドネシア人・客家人など）に関する理解を深めた。私は長い間、政治立場の違い大陸中国で生まれ育てた人でもあり、今度のツアーは自分にとって、台湾の視点からその歴史と現状を了解するためのとても貴重な機会である。特に台湾大、ソウル大の学生たちとの議論を通して、彼らの思考などからいろんな知恵をもたらした。

## ④ 進路への影響について

東アジアの社会学史・理論の研究を行っている私にとって、今度の経験は自分の問題関心と深くつながっている。お互いに共通的な問題関心をたくさん共有しながら、それぞれ独特な歴史と現状を有する諸社会にとって、欧米から由来した社会理論に対する地方化はどこまで必要であり、社会学の土着化はどこまで押し進めばいいのかについて、たくさん新しい課題は今回の経験から出現した。この体験を生かして、これからの研究活動で自分の問題意識と視野を広がる意欲はわいてくると感じる。